

マニ教徒を完全には排斥しない。かつてマニ教徒であったアウグスティヌスは、みずからの経験と知識に照らしながら、修辭学者としての学識を縦横に生かして、マニ教徒を粘り強くかつ効果的に説得しようとした。その結果が『告白』全 13 巻というユニークなかたちを取ったのだ。アウグスティヌスはかつての友を、まことに深く気遣っていたということか。

本書は、今後、『告白』の構成や成立に関する研究を行うための必読の書物であると思う。

なお、著者は南アフリカの University of Stellenbosch の古典学の講師とのこと。

注

- 1) p.70 に、*Vita Porphyrii* とあるのは誤りであろう。
- 2) アウグスティヌスの初期著作に『告白』の種を考えることに関して、拙論「罰の語り—アウグスティヌス『自由意志論』第 1 巻—」（『富山大学教養部紀要』第 24 巻 1 号（1991）所収）に触れるところがある。なお、James J. O'Donnell, *Augustine: Confessions*, vol. 1 (1922), p. xlviiii を併せて参照されたい。
- 3) p.80 に *exitare* とあるのは誤り。
- 4) 拙論「回心と眠—アウグスティヌスとパウロの回心をめぐって—」（『プラトニズムの歴史における人間観の変遷』（平成 14 年度～平成 17 年度科学研究費補助金〔基盤研究(BX1)〕研究成果報告書）（2006）所収）で、この箇所について考察を加えた。

John Peter Kenney

The Mysticism of Saint Augustine: Rereading the Confessions

Routledge, 2005, pp. xv + 160

佐藤 真基子

本書は、問題提起と研究史概観、本論の議論構成の説明がなされる序章と、各部三章ずつ全三部から成る本論、および結論から構成されている。以下に、重要と思われる

る議論を、序章から順を追って説明する。

アウグスティヌスは『告白』第VII巻においてミラノにおける神体験を、第IX巻においてオスティアにおける神体験を語っている。アウグスティヌスがそこで語る神秘論は、彼自らの体験に基づいているのである。「神秘論 (mysticism)」といっても、その捉え方は時代によって、あるいは文化によって異なる。現代の西洋文化においては、William Jamesの研究を契機として、社会的、儀式的現象として捉えるよりも、個人的体験の問題として神秘論を捉える仕方が主流となった。そのため『告白』におけるアウグスティヌスの記述は、ラテン神秘思想における個人的神秘体験の一つのモデルとして、20世紀中頃から盛んに研究されてきた。

序章においてKenneyは、このような研究史的背景を指摘した上で、Henry, Courcelle, O'Donnellらの解釈を挙げ、『告白』におけるアウグスティヌスの神秘体験の解釈史を概観する。それら先行研究においては、アウグスティヌスが自らの体験を新プラトン主義の用語法を用いて語っていることに着目して、その体験はいわば新プラトン主義的観想であって、ミラノの体験はその失敗であるがオスティアの体験は成功であるとか、オスティアの体験も成功とはいえない等の解釈がなされている。そうした解釈に対してKenneyは、アウグスティヌス自身がその出来事をどのように解釈し、それによって何を知り、そこから彼の人生にとってのいかなる実りを得たかという、より広い文脈においてその神秘体験の記述を扱う必要性を主張する。そして、神の観想についてのアウグスティヌス独自の神学が何であるかを問う視点が、先行研究において欠けていると指摘する。かくして本書の目的は、『告白』における神秘体験の記述について、先行研究の読み方に替わる読み方を提示することに置かれている。

アウグスティヌスは『告白』第VII巻において、「プラトン派の書物」を読んだと述べている。われわれは、彼がそのいずれの書物を読んだのかは必ずしも特定できないが、その書物から彼が何を見出したかを推察することはできよう。そこでKenneyは第I部において、プロティノス『エンネアデス』第IV巻から第VI巻のテキストを中心に、神の観想についての議論を分析している。Kenneyによれば、プロティノスにおいて「観想」は知的であるばかりでなく救済的でもある。というのも、観想がもたらす照明を通して、魂は自らが神的なものであり一者とともにあることを知ると考えられているからである。プロティノスにおいて観想は、「静かな孤独」、「ある種の休息」であって、魂は自ら以外のいかなる救済者も必要としないと考えられている

ことを Kenney は指摘する。

第 I 部の議論をふまえて、続く第 II 部では、「プラトン派の書物」からアウグスティヌスが何を見出したかが検討されている。たしかに、非物体的な存在を信じることについての哲学的説明を有している新プラトン主義的超越論を学んだことは、アウグスティヌスにとって、マニ教的二元論から脱し回心する転換点となった。しかし彼はカトリックに回心したのであって、新プラトン主義に回心したのではない。じっさい、魂を神的なものとして捉え、観想を魂の「休息」として説く新プラトン主義の神学と、アウグスティヌスのミラノにおける神の観想についての記述は異なっている。彼は観想に際し、「愛と恐れに震えた」(VII, 10, 16) と述べている。ミラノにおける神の観想は、魂が根本的に神と隔たっていることを知らしめられた体験として語られているのである。ではアウグスティヌスは観想に失敗したのか。Kenney は、アウグスティヌスは観想に失敗したのではなく、むしろ観想による到達に失望したのでであると分析する。新プラトン主義によってアウグスティヌスは神についての知を与えられたが、救済、すなわち「神を享受すること」は与えられなかった。しかしアウグスティヌスは、存在であり愛である神を観想において見出した。観想の体験は、新プラトン主義とは別の論法によって表現されているのである。

続いてオスティアのヴィジョンが検討される。アウグスティヌスは第 VIII 巻において、いかにしてキリスト教が新プラトン主義にとって代わるかを論じ、回心と洗礼について語った後、第 IX 巻の終わりに、オスティアにおける神の観想について述べている。このような議論構成をアウグスティヌスは意図して採用しており、洗礼を経た魂がどれほど深く永遠性に近づくかが語られているのがオスティアの物語である。そこでアウグスティヌスとモニカが見出した神は、一時にあらゆるところにあり、われわれの魂を支える神であり、われわれを創造した神である。ミラノにおいて観想された神が新プラトン主義が語る「一者」とは異なっていたのと同様に、オスティアにおける神の知もまた、新プラトン主義とは異なっていると Kenney は指摘する。また、この体験は聖書の様々な言葉によって語られているが、その中心はパウロである。そしてそのパウロの言葉はいずれも、死者の復活について述べられているテキストの言葉である。聖書においては、魂のみならず肉体も復活すると考えられているが、オスティアのビジョンは肉体的な性質は後に残され、霊的な性質しか有していない。アウグスティヌスはこのような語り方によって、救済が観想とは区別されることを示してい

る。観想が受け取った「最初の実り」は、死後來るべきより完全で最終的なあり方の前兆であって、終着点ではないのである。

かくして、アウグスティヌスにおいて観想は、神の恵みによって不変の真理を見出しうる魂の力と永遠には神にとどまり得ない魂の力の、両方をあらわにするものである。そして魂に力と希望を与えるのがキリストの復活である。キリストを告白することは、観想それ自体を新しく、深くする。こうした観想についてのキリスト教的な理解は、『告白』第 X 巻以降でいっそう明白にあらわれると Kenney は分析する。かくして第 III 部は、オステシアの体験直後に執筆された『魂の大きさ』における観想の概念について検討した上で、『告白』第 X 巻から第 XIII 巻における、観想の深化を辿ることに充てられている。

Kenney によれば、『魂の大きさ』における観想についての考え方はすでにキリスト教的なものであるが、観想の「実り」はこの世でも持続しうるとみなされている。しかしこれより 10 年以上後に書かれた『告白』では、このような持続可能であるという主張は変化している。洗礼を経ても神体験を経ても、アウグスティヌスにとって、魂の道徳的墮落は完全に食い止められることはなかった。こうした魂の欠陥を神の助けによって把握し、自分自身と神そして隣人に知らせることが、救いを旨とすることであり、「告白」という行為の目的である。かくして、告白のない観想は無益である。さらに『告白』自体がそれを明示しているように、キリスト教的観想は、聖書を参照することから生まれる知と光を基盤としている。観想の実践は教会にも聖書にも根ざした営みとして考えられているのである。

以上の分析を踏まえて、オステシアのヴィジョンをわれわれがいかに理解するべきか、また、プロティノスの神学との関係についてふたたび吟味される。Kenney は、モニカについての記述に注目すると、「プラトン主義の書物」から見出された考えとは別の、アウグスティヌス自身のキリスト教的観想についての説明が得られると指摘する。というのも、モニカは知的訓練によってではなく、教会において育まれた、自らの内なる霊の力によって神を見たからである。そして Kenney は「天の天」という聖書の言葉についての第 X 巻以降の議論を分析することによって、モニカによって見出されたのは、神の創造力たる「知恵」であり、自らの魂の救済者がいるということであることを、そしてそれがアウグスティヌス独自の観想についての神学であることを示す。

かくして、『告白』はキリスト教的観想についてのアウグスティヌスの説明と、そこにキリスト教的観想があらわれる自伝的内容の表明である。理論と出来事は深く結び付けられている。アウグスティヌスは単に回想を書いたのではなく、経験の光の中で、自らの神学を描いたと Kenney は言う。

以上本書は、現代的な「神秘論」の枠組みの中でアウグスティヌスの神体験を捉える先行研究とは一線を画すものである。しかもその研究は、アウグスティヌスにおける「観想」の概念を明らかにするばかりでなく、その解明を通して『告白』全体の議論構成とアウグスティヌスの意図について新たな読み方を与える画期的なものである。

著者は1995年よりアメリカの St. Michael's College 教授（宗教学）。アウグスティヌスおよび新プラトン主義をその研究領域の中心としている。著作は本書の他に、*Mystical Monotheism: A Study In Ancient Platonic Theology* (Brown University Press/University Press of New England, 1991; paperback edition, 2002) が刊行されている。

The Cambridge Companion to Anselm,
 Edited by Brian Davies and Brian Leftow,
 Cambridge University Press, 2004, xiii+323.

矢内 義顕

本書は、ケンブリッジ大学出版局から出版されている Cambridge Companions の中の一冊である。このシリーズでは、すでにアウグスティヌス、アベラール、トマス・アクィナス、ドゥンス・スコトゥスなどが出版されている。アンセルムスの入門書が英語圏で出版されたのは、Jasper Hopkins, *A Companion to the Study of St. Anselm*, University of Minnesota Press, 1972 以来のことである。ドイツ語圏では、Rolf Schönberger, *Anselm von Canterbury*, Verlag, C. H. Beck, 2004 があり、175 頁の小著だが、テキストの緻密な読解がなされている。だが、神学的テーマは論じられ